

雑誌『民主教育』の創刊と展開

小 熊 伸 一*

A Study on the Educational Journal of The Democratic Education

OGUMA Shinichi

要 約

本稿は、占領期に創刊された教育関係雑誌の中から、戦後、いち早く創刊された総合雑誌『民主教育』の創刊とその特徴について分析したものである。『民主教育』は、国立国会図書館をはじめ、国内外の図書館でも巻号数が揃いで閲覧できる場所はない。現在、プランゲコレクションでも、第2巻第2号以降の号数しか所蔵されていない。そこで、長年にわたり、古書店などで収集してきた号数と合わせ、ようやくその全貌を明らかにすることができたため、ここに紹介することにした。

キーワード：プランゲコレクション、WDC コレクション、占領期、教育関係雑誌、『民主教育』

1. はじめに

本稿は、占領期に創刊された教育関係雑誌の中から、戦後、いち早く創刊された総合雑誌『民主教育』の創刊とその特徴について分析したものである。

周知のように、占領期に創刊された教育関係雑誌は、その大半が、アメリカ合衆国メリーランド大学マッケルディン図書館所蔵のプランゲコレクションで閲覧することができると考えられてきた。しかし、プランゲコレクションには、多くの欠号があり、近年、その欠号を埋める史料としてアメリカ議会図書館に所蔵されている WDC コレクションが注目されてきたが、すべて補うことができない。そのため、筆者は、海外の資料調査に加えて国内の資料調査を重ねるとともに、古書店を通じて、原本を可能な限り収集してきた。

ここに取り上げる『民主教育』全16冊は、日本最大の蔵書量を誇る国立国会図書館をはじめ、国内外の図書館で巻号数が揃って閲覧できる場所はない。

また、管見に入る限り、雑誌『民主教育』を取り上げた先行研究は、木戸若雄の『昭和の教育ジャーナリズム』（大空社 1990年）のみである。木戸は、同書の中で、『民主教育』は、「総合雑誌」と位置づけているが、木戸自身、創刊号から第1巻第6号までしか見ておらず、『民主教育』の全容解明にいたっていない。

そこで、長年にわたり、国内外の図書館調査や古書店などで『民主教育』を収集し、ようやくその全貌を明らかにできる状態になったため、ここに紹介をしたい。

2. 藤原喜代蔵¹⁾⁻⁴⁾と雑誌『民主教育』の創刊

『民主教育』は、1946（昭和21）年4月1日、日本経国社から創刊され、48（昭和23）年9月1日発行の第3巻第4号まで継続して発行された教育総合雑誌である。創刊号の表紙には、「The Democratic Education」の文字が付され、主宰藤原喜代蔵の名前が入っている。ちなみに、創刊号は、A5判、本文80頁、定価4円であった。

発行所日本経国社の社長であった藤原は、1882（明

* 中部大学現代教育学部児童教育学科
中部大学現代教育学研究所

治15)年4月1日、鳥取県東伯郡舎人村大字北福の農家藤原市三郎の長男として生まれた。1891(明治24)年、舎人尋常小学校に入学したが、93(明治26)年5月、尋常科3年の途中で退学した。その理由は定かではない。その後、上京し、弁護士を志すが、日露戦争が起こり、従軍。帰還後、竹越与三郎に認められ、読売新聞社に採用され、教育問題の担当記者になった。1909(明治42)年、処女作『明治教育思想史 全』(富山房)を出版後、文部次官岡田良平の推薦によりイギリス留学を命ぜられ、2年間滞在し、1912(明治45)年、帰国し、『大英国の教育』(文教会)を出した。以後、田所美治が文部省普通学務局長となり、帝国教育会理事を兼ねるに及び、帝国教育会に迎えられ、雑誌『帝国教育』の編輯主任を担当した。その間、『近代教育学大集成』や『人物評論学界の賢人愚人』などを発表し、「教育万般に亘る自由澁濶なる批評振り」が注目された。1937(昭和12)年、一転し、出版業を始め、1940(昭和15)年、東亜政経社(東京神田区神保町3の2)を設立し、『明治・大正・昭和教育思想学説人物史』(全4巻)を刊行している。

戦後、社名を東亜政経社から日本経国社に変更し、46(昭和21)年4月、雑誌『民主教育』を創刊、同年7月には、絵雑誌『ナカヨシクラブ』を、翌8月には、国民学校低学年向『新幼年』、国民学校高学年向『小国民』を創刊、これら3点を「三大児童雑誌」と称した。また、11月には、『公民教育』(のち『小学教育』と改題)ならびに『青年教育』(のち『中学教育』と改題)を創刊し、『科学教育』、『地歴教育』、『国語教育』と合せて「六大教育雑誌」とした⁵⁾。

また、1948(昭和23)年4月から社名を自由書院と改めた。

『民主教育』の主宰は、社長の藤原喜代蔵があたり、「各階層の教育指導者にも、一般文化人にも、共にひとしく愛読され得る『教育を中心とした文化的総合雑誌』」を目指して編集を行った。

しかし、当時の「出版恐慌難」の煽りを受けて、日本経国社は、「三大児童雑誌」の発行権を日本児童文化連盟に譲り、教育雑誌に主力を注ぐことになった。また、藤原自身65歳という高齢であったこともあり、株主総会で教育評論家の上田庄三郎⁶⁾が取締役に選任され、編集部長を兼ねることになった。

その後、1947(昭和22)年11月1日発行の第2巻第5号から、上田が他に転じたため、小野金之助が『民主教育』の編集を受け継ぎ、翌48(昭和23)年9月1日発行の第3巻第4号をもって終刊となった。

雑誌の大きさは、初めA5判であったが、1946(昭和21)年11月1日発行の第1巻第7号から、「用紙を市場から買い漁るのに、B5判の方が入手し易い」ため、B5判に変更した。

3. 時期区分

次に、『民主教育』の時期区分を行い、同誌の記事傾向を分析してみたい。

- | | | | |
|-----|--------|-------------------------|------------------|
| 第1期 | 第1巻第1号 | 1946(昭和21)年4月1日～第1巻第6号 | 1946(昭和21)年10月1日 |
| 第2期 | 第1巻第7号 | 1946(昭和21)年11月1日～第2巻第4号 | 1947(昭和22)年8月1日 |
| 第3期 | 第2巻第5号 | 1947(昭和22)年11月1日～第3巻第4号 | 1948(昭和23)年9月1日 |

(1) 第1期

第1期の大きな特色は、社主藤原喜代蔵が、毎回、巻頭言に論稿を寄せたことが注目される。

創刊号の巻頭には、藤原の「教育上より観たる天皇制問題」ならびに「教育勅語・御真影・宮城遥拝・行幸奉迎等を如何にすべきか」を載せている。これは、前年の45(昭和20)年10月4日、GHQ/SCAPから出された「政治的市民的及び政治的自由に関する制限の撤廃に関する覚書」により、戦前、タブーにされていた天皇制の問題に触れることができるようになったためと思われる。以後、藤原は、47(昭和22)年1月1日発行の第2巻第1号まで、継続して巻頭論文を執筆している点が本誌の最も大きな特色である。

創刊号の第2の特色は、明星学園理事長であった赤井米吉の「米国教育使節の日本教育課題に就いて」や自由新聞調査部長であった法貴三郎が「国際政治宣伝と教育的措置(上)」を発表するなど、国際的な

視野から敗戦下の教育の諸問題を捉えようとして編集していたことが窺える。なかでも、赤井の論稿は、3月6日に来朝した米国教育使節団の教育調査の課題について述べ、使節団に協力して目的達成を完了しようとした原稿として注目される。

また、同誌には、「名家随筆」をはじめ、三熊住室（元台北帝国大学教授）の「教育の民主化をはかれ」、山田千之（高等女学校教諭）の「牧歌的教育から生誕的教育へ」を載せる一方、「民主評論」、藤原喜代蔵の「文部省の安倍陣容を許す」、有光次郎（文部省教科書局長）の「国語国字問題解決の方向」、照井猪一郎の「教科書禁止後の修身地理歴史教授—禁止教科をめぐって—」など、多彩な記事を収載している。

さらに、同誌には、「教育転換設計三題」と題し、千葉県東金町国民学校長であった鈴木源輔の「学校経営を如何に転換したか」、矢嶋正信（滋賀県瀬田国民学校長）の「増産教育の一断面」、熊川千彌（大日本教育会長岐阜支部事務局長）の「農村倫理運動に起つ！」など、戦後直後の国民学校の実践記録を載せる一方、「新人旧人」欄（関口泰、村岡花子）を設け、人物評論も行っている。

その他、本誌には、政治・経済・社会の各界の展望をはじめ、国内外のさまざまな教育情報も載せるなど、総合雑誌として性格を意識して編集しようとしていたことが窺える。

翌5月1日発行の第1巻第2号は、藤原の「憲法改正草案中教育家の必知すべき重要点」をはじめ、桜井晴芳の「神話を結び附けた迷信的国史を排す」、マ元帥声明「民主教育化の礎」、藤原の「国号・国旗に関する疑念を一掃せよ」のほか、黒田操の「引揚教師のうた」、（名家随筆 小西重直の「ネグロ物語」、藤原喜代蔵の「稲毛金七（詛風）の死」、河東敏の「極限」、青山重広の「生活権の擁護と教員組合の運営」、原田実（早稲田大学教務部長）の「教育学界の巨星 ジョン・デューイの実験学校」、「民主評論」、椎崎法蔵の「国語国字問題と民主主義の完成」、照井猪一郎の「禁止教科課題 歴史地理教育の正しい在り方」、木下正雄の「政治時報 各界展望」、高橋生記の「経済時報」、高田生記の「社会時報」、「文化時報」、吉川俊彦の「米国の成人教育の変更と現状」、赤門天狗の「新人旧人 疑問の人海後宗臣君」、伊藤生更（大日本教育会山梨県支部事務局長）

の「若き教育者を讃ふ」、坪井正（岡山県赤磐郡江西校訓導）の「学校の転換期に寄す」、近藤修博（東京第三師範学校訓導）の「児童の Activity に就いて」、阪井学人の「日本文化人の恩人 明治教育の功労者 クラーク」などを掲載した。

その他、同号には、「飛耳張目」、「国内教育情報」、「海外教育情報」、「ブック・レビュー」、「教育月報」欄を設け、国内外の詳細な教育情報などが収録されている。以後、終刊まで継続してこれらの情報を伝えている。

6月1日発行の第1巻第3号は、藤原の「日米合作の日本教育改革草案中特に慎重審議すべき重要点」をはじめ、吉田昇（女子高等師範学校教授）の「今後に於ける教育学の課題」、長沢信夫の「文化の概念と内容」を載せる一方、（名家随筆 坂静雄（京大教授工学博士）の「教育雑感」、城西隠士の「人物一夕話」、川端柳介の「書斎独話（二）」、森まさる作詞「朝はどこから」、法貴三郎の「国際政治宣伝と教育的措置（下）」、小野生の「民主評論」、「連合軍最高司令部教育に関する指令一覧」、藤原喜代蔵の「教育代議士と婦人代議士」、「四方山話」、「政治・経済・社会・文化の各時評」、目黒栄の「若き訓導諸君に思ふ」、「新人旧人 保守的内閣官僚の殿将 吉田茂論」、作間三四郎の「三宅雪嶺先生を憶ふ」、悠々閑人の「読書余録」、額田幸太郎の「明治の新興文化 明治初年学界漫話」、「国内教育情報」、「海外教育情報」、「常用漢字千二百九十五字 国語審議会の原案決定」、「飛耳張目」、「教職員追放令公布」、「出版界の動向」、「教育月報」欄を設けている。

7月1日発行の第1巻第4号から、本誌は、用紙難のため、定価が4円から5円になった。

第1巻第4号は、藤原の「教職員追放の重大影響」をはじめ、田中耕太郎（文部大臣）の「全国の教育者諸君に訴ふ」、吉田熊次の「民主主義者福澤諭吉翁と士魂」を載せる一方、「名家随筆 藤原喜代蔵の「旧友石橋湛山君」、悠々閑人の「読書余録（2）」、川端柳介の「書斎独話（3）」、青木誠四郎（文部省教科書局調査課長）の「国民学校に於ける公民科指導」、都築益世作詞「赤ちゃんのお耳」、寺中作雄（文部省社会教育局教育課長）の「文化国家建設と公民館」、藤原喜代蔵の「安倍能成と田中耕太郎」、「民主評論」、神田哲史の「雪嶺と蘇峰」、室住熊三の「封建的科学

者」、「四方山話」、阪井学人の「明治文化の恩人（上）人類愛の化身ヘボン」、「各界展望 政治・経済・社会・文化の各時評」、石崎正（茨城県猿島郡七郷国民学校訓導）の「新教育設計（1）国語教育に於ける形象理論の再吟味」、木原正利（大日本教育会滋賀県支部事務局長）の「教育法としての「調査」、近藤正美の「終戦後の児童と教育の現状」、「新人旧人小宮豊隆論」、吉田由彦の「国文学界への起訴状—藤村作博士等の「新方向」—」などを掲載している。

翌8月1日発行の第1巻第5号は、藤原の「教職員組合の正しき在り方」をはじめ、日高第四郎（文部省学校教育局長）の「今後の日本教育」、今日出海（文部省社会教育局芸術課長）の「新教育設計 児童文化と新しき教育」を載せる一方、（随筆 近藤寿治（前広島文理大学学長）の「飛鳥時代の教育」、三浦藤作の「書窓随記」、一條徹の「現代の教育と教員組合の動向」、縣要三の「新人旧人 城戸幡太郎論」、赤門天狗の「田制佐重君を評す」、阪井学人の「人類愛の化身ヘボン」、藤原喜代蔵の「井蛙のたわごと」、北澤武の「学校体錬科の授業方法」、三石巖の「科学教育と国民学校」、稲川三郎の「新しき教育は芽ぐむ」、小野柁夫の「民主評論」、古稀庵頑徹の「教育雑誌今昔物語（一）」、「全文 米国教育使節団報告書（上）」などを載せている。なかでも、「教育雑誌今昔物語」は、2回連続で、「米国教育使節団報告書」は、3回にわたり連載している点は、注目される。当時、「米国教育使節団報告書」を掲載した教育関係雑誌は意外と少ない。

8月1日発行の第1巻第6号は、藤原の「日本民主化の礎石としての公民科と公民館」をはじめ、小西重直の「生生誕二百年記念 米国の国民教育とペスタロッシー」、「街の放送室」、佐々弘雄（朝日新聞社論説委員）の「日本の民主主義」を掲載する一方、（初秋随筆 吉田熊次の「西村茂樹翁」、田中令三の「危機に直面せる青年教育」、井出季知太の「日華デモクラシー管見」、香原一勢の「いのち」、山室民子の「思ひつくまに」、藤原喜代蔵の「井蛙のたわごと」、ボナロ・W・オブアストリートの「民主主義的教育の特質」、松尾俊郎（文部省教科書局事務官）の「暫定地理教科書の新方向」、尾崎逋四郎（同）の「暫定地理教科書の取扱ひ方」、青木章心の「国民学校に於ける学校放送の活用」、「新人旧人 人民の学者

羽仁五郎論」、高橋喜惣勝の「民主評論」、古稀庵頑徹の「教育雑誌今昔物語（二）」、「全文 米国教育使節団報告書（中）」などを掲載している。

（2）第2期

第2期に入ると、11月1日発行の第1巻第7号から、雑誌の大きさが、A4判からB5判に変わり、定価も8円になった。

同号の第1の特色は、雑誌の判型が大きく変わったことである。しかし、藤原の「米国化する日本教育の到達点」をはじめ、田中耕太郎の「更生日本の精神的基礎」、宮坂哲文の「茶道的教養の性格（上）—日本教育史の一問題—」を載せる一方、吉田熊次の「随筆 雨読閑話」、青木実の「年齢と業績」、悠々閑人の「読書余録（三）」、香原一勢の「一銭で買へる物」、船越章の「解説 教育権の独立と地方教育行政」、「まちの放送室」、相良惟一（文部大臣官房適格審査主事）の「教員適格審査基準」、渡邊矢三郎（文部省青少年教育課員）の「青年教育への指針」、「民主評論」、阪井学人の「明治文化の恩人 明治日本の紹介者アーネスト・サトウ」、城西隠士の「小学校教員出身の世界的文豪ウェルズ逝く」、「全文 米国教育使節団報告書（下）」、「新人旧人 京都哲学派高坂正顕論」、三浦藤作の「ブルーノ・タウトと方丈記」を掲載するなど、従来の記事傾向と変わらない。

また、「新生日本と教育の新方向」と題し、森一（秋田県立湯沢高等女学校教諭）の「数学指導の一断片」、石本正隆の「私の教育実践の方策」、日吉武義の「過度期に於ける教室の民主的経営」、古稀庵頑徹の「教育雑誌今昔物語（完）」なども収録している。

第2期の大きな特色は、1947（昭和22）年1月1日発行の第2巻第1号以降、表紙に「新教育建設への総合的指導雑誌」と銘打ったことと特集号を組んだことがあげられる。

また、第2巻第1号は、「国体論再検討特集号」を組み、藤原の「新憲法に繞る国体変革論の帰着点」ならびに三浦藤作の「曖昧多義なる国体概念を解明す」を載せている。これは、前年の「日本国憲法」の公布に呼応して「国体論再検討特集」を組んだ論稿である。

以下、同号には、随筆（川端柳介の「書斎独語（四）」、近藤正美の「闇の教育」、秋山繁一の「教育雑誌寓話」）

をはじめ、特選二大 解説文・新歴史教科書の主眼点（豊田武の「これからの歴史教育」、宮下三七男の「新歴史教科書の特色」、宮坂哲文の「茶道的教養の性格（下）—日本教育史の一問題—」）を収録している。

第2巻第1号のもうひとつの大きな特色は、女教員座談会「女教師の適性と進路は！」を開いたことである。司会は、栃木県教育会事務局長瀧田為寿が務め、飯田モト（栃木県塩谷郡熱田国民学校）、今泉静江（宇都宮市西国民学校）、神山貞子（栃木師範女子部附属校）、佐藤和子（栃木市第二国民学校）、高山ミツ（栃木師範男子部附属校）の5名の女性教員が参加している。戦後直後にいち早く開かれた女性教員の座談会として注目される。また、同誌には、山田千三の「男女共学と女子中等教育—女子教育の振興に関連して—」も併載されている。

1947（昭和22）年3月、出版恐慌のため、発行所の日本経国社は、発行方針を変更し、3つの児童雑誌を引き離し、発行権を日本児童文化連盟に移した。また、新学制の発足により、青年学校が廃止になったため、雑誌『青年教育』を『中学教育』に改題した。

3月1日発行の第2巻第2号は、前号と同様に特集を組み、「歴史教育の再建」と題し、文部省教科書局の「『くにのあゆみ』の解説」古代（塩田喬）中世（渡部是）近世・現代（小西四郎）、田中惣五郎の「『くにのあゆみ』を読みて」、吉田貞之助の「『くにのあゆみ』取扱の実際」、文部省の「国史教育指導要領」を掲載している。

また、同号のもうひとつの大きな特徴は、原田実（早稲田大学教務部長）の「米国中央政府の教育行政」をはじめ、田中耕太郎の「新憲法の思想的基礎」、藤原喜代蔵の「教職員の待遇改善問題」、菅菊太郎の「慶応義塾と民主主義教育—草間時福—岩村権令—末広鉄腸—」などの論稿に加えて、（随筆 吹田順助の「教師生活の思い出」、石黒修の「新語のインフレ」）、荒木記者の「アメリカン・スクール」「思潮展望 学生運動の特質」、堀内喜市郎の「学校経営の新形態」、大崎六郎（宇都宮農林専門学校教授）の「私の教授法」、福井正一（和歌山県東年安郡下里国民学校）の「研究会の一試行案」、作岡三四郎の「漢字制限余談」など、多彩な記事を掲載している。

5月1日発行の第2巻第3号には、上田庄三郎の巻頭言「平和教育の具体的目標」をはじめ、文部次官であった有光次郎の「新学制と社会科」、重松鷹泰（文部省事務官）の「社会科の学習指導」を載せる一方、XYZ「教育時報」、『こくご』の印象記、赤井米吉（明星学園創設者）の「男女共学の問題」、田制佐重の「民主教育の綱領」、「街の放送」、石黒修の「ローマ字教育」、文部省案「ローマ字教育の方針」、「ローマ字の綴り方」、長井眞琴の「ローマ字の問題」、守田保の「漢字制限漫語」、藤原喜代蔵の「蛙鳴録」、石本正勝の「算数教育の反省」、原清太郎の「戦災孤児のために」、「民主評論」、正木聖夫の「長篇詩「灘の海」—若き教師の歌える—」、民主教育研究会の「米国の学校教育（1）」など、新学制発足にあたり、直面した教育問題を中心に取り上げている点が大きな特色である。また、「新人旧人」欄を設け、藤原喜代蔵の「新文部次官 有光次郎論」や法貴三郎の「東京文理科大学長論」を収めている。

第2巻第4号は、3ヶ月遅れて8月1日発行された。同号は、当時の「紙飢饉とインフレ激化の波」に追われ、本誌も32頁（前号は、48頁）に減った。しかし、同号には、巻頭言の「森戸文相の文教施策」をはじめ、杉森孝次郎の「世界人権主義と教育」、木宮乾峰（文部省教科書局事務官）の「教育における自由と「自由研究」」、田中豊太郎（東京高師附属小学校教員）の「自由研究の指導について」を載せる一方、石森延男の「ある問答（1）—新国語教科書について—」、安達健二の「教育基本法制定の経過」、百田宗治の「随筆 邊疆日録」、「民主評論」、丹呉典子の「『こくご』を手にして」、花田哲幸（東京高師附属小学校教員）の「児童文化の問題」、青木章心（文部省学校教育局青少年教育課事務官）の「放送教育の必然性—とくに学校放送を中心として—」、虎の門逸人の「教育時評 昇格か降格か」、法貴三郎の「東洋大学学長 藤原猶雪論」、「座談会 これからの教育雑誌」などを掲載している。

なかでも、「これからの教育雑誌」は、『教育技術』の野瀬寛顕、『教育文化』の岡田八郎、『教育改造』の柏熊俊司、『民主教育』の上田庄三郎の4名が、出席し、「これからの教育雑誌が新しい文化日本を建設する上にどんな使命をもつか」議論をしており、大変興味深い。

(3) 第3期

9月1日発行の第2巻第5号は、1万部発行された。巻頭言には、上田の「紙がかりの民主主義」を載せたのをはじめ、文部大臣森戸辰男の「教育者の諸君に誘う」、「文部省民主化の叫び」、山室民子（文部省社会教育局審議官）の「勤労の宗教的意義」、酒井市郎（拓殖大学教授）の「教育科学の再建」、田部久の「教組合同の鍵」、伊藤忠二の「民主化教育談義」を載せる一方、桑原経重の「働く青年の演劇」、堀正三の「新しい国語教育」—新国語教科書にことよせて—、黒川顕英の「新学級経営の考察」、石本正隆の「社会科と他教科の連関」、山口利水の「『物語』」、田中惣五郎（評論家）の「民主評論」、石森延男の「それぞれの立場で」、本田正信の「農村新教育風景」、近藤正美の「狂った子供」、松澤光雄の「師範附属中小学校の改革」など、多彩な記事を掲載している。

第2巻第6号は、1ヶ月遅れて11月1日、7千部発行された。巻頭言には、藤原喜代蔵の「本誌の編修綱領を宣明す」を載せたのをはじめ、茅原華山の「日本の学問、言論、教育界に共通なる根本欠陥を暴露す」、ルイス・キューモスの「職業指導の目標—中学校に於ける—」、増淵穰の「農村民主化と教育」、黒田秀俊の「民主評論」、近藤薫の「教育革新の前途」、来栖良夫（教育問題調査会員）の「児童文学論」、堀正三（東京都幡ヶ谷小学校教諭）の「児童の社会問題と社会科」、国枝治の「随筆 文学と民主主義」、中澤繁雄の「女性の被圧迫史」、三浦藤作の「三宅雪嶺の人物と事業（一）」、民主教育研究会の「米国の学校教育（2）」、法貴三郎の「H・G・ウェルズと教育の理念」、大野秋彦の「高原の学校より」などを掲載している。

明けて48（昭和23）年1月1日、第3巻第1号が5千部発行された。発行部数は、減少したが、同号には、関口泰の「民主教育の出発」をはじめ、矢野西蔵の「新日本教育の構想」、山崎匡輔の「新たなる教育理念」、島田孝一（早稲田大学教授）の「吾々の進むべき道」、岩間正吾（参議員）の「教育予算の天引と国民運動」、「教育研究費について」、玖村敏雄（文部省師範教育課長）の「新時代の教師と教養」、森田孝（文部省中等教育課長）の「新制中学校の課題と対策」などを載せる一方、「新教育と旧教育」、茅原華山の「日本の学問、言論、教育界に共通なる根本

欠陥を暴露す（2）」、中野五郎（評論家）の「生きた社会教育を望む」、「教育民主化への道」、木村忠雄（朝日新聞記者）の「文教施策と議会人の動き」、藤村作の「随筆 民主教育のために」、式場隆三郎の「学校の性教育」、安藤堯雄（東京文理科大学教授）の「民主的学校経営」、エデュアート・G・リンデンの「成人教育と民主主義的訓練」、三浦藤作の「三宅雪嶺の人物と事業（二）」、岡山巖の「国立博物館」、「民主評論」、工藤信一郎の「時事解説 対日平和会議について」、清澤格の「新しき時代」など多彩な記事を掲載している。

翌2月1日、第3巻第2号が5千部発行された。同号は、鮎沢巖の「労組法と精神と教育組合の性格」をはじめ、大田周夫の「新制高等学校の基本的性格」、山田栄の「新学制に於けるカリキュラム（教育課程）の理論」、茅原華山の「日本の学問、言論、教育界に共通なる根本的欠陥を暴露す（三）」、五島茂の「街上」、赤井米吉の「民主評論」、青木誠一郎の「教科書観念の転換」、永島正雄の「人物評論 松本淳造論」、増田幸一（文部省調査課長）の「教育実態の総合的把握への調査」の論稿を載せる一方、石橋湛山の「随筆 教師たる志望」、長谷健の「田舎ずまい」、重松伊三郎（文部省第一編修課）の「家庭科教科書の扱い方」、井坂行男（同）の「小学における成績の評価について」、高橋新吉の「心足り」、フェレン・ヘッファナーンの「小学校に於ける教室のグループ作業」、吉田熊次の「国定修身教科書編纂の回顧」などを掲載している。

なかでも、民間情報教育部小学校係職員であったフェレン・ヘッファナーンの論稿は、小学校教育の専門家としての意見をまとめたものであり注目される。また、吉田の回顧は、1901（明治34年）1月、文部省普通学務局長であった澤柳政太郎より委嘱された国定修身教科書編纂の過程を詳細に回顧した記録として興味深い。同回顧は、第3巻第4号まで連載されている。

第3巻第3号は、2ヶ月遅れて、4月1日発行された。発行部数7千部で、「平和教育」の特集を組んでいる。また、同号から、発行所の社名が、日本経国社から株式会社自由書院に変わった。

同号には、古垣鉄郎の「世界に眼を開け」をはじめ、稲垣守克の「世界連邦建設運動の現状」、細野軍

治の「精神的軍縮より精神的再軍備へ―国際心を涵養せよ―」、原田健（財団法人日本国際連合協会常任理事）の「萬邦協和の世界市民教育」を載せる一方、随筆（久松潜一の「随筆 国語教育について」、石井庄司（東京高師教授）「ことばの問題」、新居格の「ユネスコと平和主義」、近藤春文の「ユネスコと日本の教育」、「平和外交官の養成」、朝比奈宗源の「平和的人生観に立って」、牧田茂の「羽仁五郎論」、上村福幸の「教職員と平和への心構え」、原田実の「教育批判の新観点」、佐藤保太郎の「新しい教材の観方について」、野口彰の「成績考査改善の方向」、濱田常二良の「デンマークの平和教育」、東静雄の「平和な国民的修養」、吉田熊次の「国定修身教科書編纂の回顧」などを掲載している。

第3巻第4号は、5ヶ月遅れて9月1日発行された。「新教育の本質と正しい理解」の特集を組んでいるが、発行部数は減少し、4千部であった。

同号の巻頭には、関口泰（朝日新聞社論説委員）の「教育行政と大学自治」を取り上げ、はじめて大学の問題を収めている。以下、幣原坦（元台北帝大教授）の「新教育の展開」、平田與一郎の「教育改革の真意義と目標―対日理事会の報告書をめぐって―」、宮田齋（成女高等女学校長）の「新教育の理解について」を載せる一方、教育学者小西重直をはじめ、代議士・文教委員高津正道、教育学者吉田熊次、参議院文教委員田中耕太郎、教育刷新委員児玉九十による〈教育建設への課題〉、小林澄兄の「生活は仕事を急ぐ」、守谷美佐子の「母が見る国語教育 小学一年「こくご」学習を顧みて」、トーマス・エッチ・マックレール（連合軍総指令部民間情報教育局）の「新制大学と一般教育」を掲載している。なかでも、『民主教育』の編集部がはじめて大学問題を取り上げ、教育刷新委員会の関口泰やCIE顧問のマックレールの論稿が掲載されたことは注目される。

また、最後に、実録記録として、牛山栄治の「新制中学校経営の指針」、向山義章の「学校の民主的経営」、松村謙の「民主的教科経営の実際」、染田屋謙相（第三師附属教諭）の「「社会科の在り方」の新観点」、野口英三郎（東京都教育局調査室主査）の「学制改革実施の跡を見る」、吉田熊次「国定修身教科書の回顧」などを掲載している点が、もうひとつの大きな特色である。

以後、『民主教育』は、管見に入る限り、同号をもって終刊を迎えたと思われるが、とくに終刊の辞は見当たらない。

4. 執筆者

次に、執筆者について見てみよう。

以下、執筆回数を見てみると、『民主教育』を主宰していた藤原喜代蔵（執筆回数11回）が圧倒的に多いことがわかる。途中、上田庄三郎（3回）に交代するまで、巻頭言を担当し、同誌をリードしていたことがわかる。

また、藤原が読売新聞社の記者や雑誌『帝国教育』の編集を務めていたことなどから、文部省関係者との交流も多く執筆者も多かったものと思われる。

次いで、多く執筆したのは、東京帝国大学教授であった吉田熊次（7回）であり、以下、赤井米吉（3回）、法貴三郎（3回）の順になっている。

5. 読者について

『民主教育』は、どのような人々に読まれていたのだろうか。最後に、読者についても触れておきたい。

6月1日発行の第1巻第3号には、「民主教育を読みて」の欄が設けられ、下村壽一（女子学習院長）、長田新（広島文理科大学長）、田中寛一（東京文理科大学名誉教授）、近藤壽治（前広島文理科大学長）の4名が、短文の感想を寄せている。

また、翌7月1日発行の第1巻第4号には、秋田県立湯沢高等女学校森一より、「熱意なる愛読者より来信」が寄せられ、「斯界の王者たる貫禄を具へた雑誌」であったと高い評価が書かれている。

さらに、第2巻第4号には、「愛読者通信」欄が設けられ、法貴三郎の「「民主教育」3月号編集批判」、山口県S中学校本田の「新教育の第三階程者として」、高知県正木聖夫の「青年的迫力」の3点が紹介されている。

また、編集が上田庄三郎と交代した第2巻第5号には、前号同様、「愛読者通信」欄を設け、愛知県の鈴木徳成は、「はつらつたる教育運動を」巻き起こしたいと述べ、一読者から「主幹に」要望を寄せている。続いて、和歌山県堀内喜市郎の「転身の実業界

から」、静岡県松下生の「暗い教育界」も収録している。

6. おわりに

以上、雑誌『民主教育』の特色とその変化について明らかにすることができた。

分析の結果、第一に、同誌は、戦後直後に藤原喜代蔵により創刊され、「新教育建設への総合的指導雑誌」を目指して創刊された雑誌であった。その記事傾向は、教育問題に関する論稿をはじめ、政治、経済、社会、文化に関する多彩な記事を掲載する一方、国内外の教育情報や人物評などを掲載している点が大きな特色である。

第二は、第2期以降、雑誌の判型が大きく変わったが、記事傾向に大きな変化はなく、第3期以降、特集記事を組むようになり、「歴史教育」をはじめ、「平和教育」や「新教育の本質と正しい理解」など、社会の変化に応じた教育問題を取り上げている。

第三に、本誌は、総合雑誌として誕生した教育関係雑誌であったが、藤原が高齢であったことや「紙飢饉とインフレの激化」の影響を受け、継続されることなく短命に終わった。なお、『民主教育』と同時期に創刊された小学館の『教育技術』（のちの『総合教育技術』）や明治図書の『教育公論』などの教育総

合雑誌は、こうした状況を乗り越え、継続して刊行されていくことになる。

註

- 1) 唐澤富太郎編『図説 教育人物事典 上』ぎょうせい 1974年
- 2) 篠村昭二『鳥取教育百年史余話』上 県政新聞社 1976年
藤原喜代蔵の生年月日については、篠村昭二の調査に依拠した。
- 3) 「藤原喜代蔵君」（為藤五郎編『現代教育家評伝』文化書房 1936年）
- 4) 『藤原喜代蔵文功記念録』日本経国社 1947年
- 5) 『青年教育』は、1946（昭和21）年12月1日、株式会社日本経国社から創刊された。同誌は、1947（昭和22）年、青年学校の廃止にともない、誌名を『中学教育』に変更した。以後、11月1日発行の第2巻第4号まで確認できた。なかでも、創刊号の巻頭に掲載された牛山栄治の「学制改革問題私見」は、46年3月1日、牛山が、民間情報教育局を通じて、米国教育使節団に手交した「教育制度改革私見」に多少の修正を加えて発表した論稿として注目される。
- 6) 上田庄三郎については、『上田庄三郎著作集』（全6巻）国土社 1978年、西村政英『評伝 上田庄三郎』土佐出版社 1991年などがある。

受付日 2011年9月30日

受理日 2011年11月14日